



## 方向・場所倒置構文の派生と構造

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00004207">https://doi.org/10.32150/00004207</a>

## 方向・場所倒置構文の派生と構造

福 田 薫

### 1. はじめに

英語は SVO という標準語順を示す典型的な言語の一つである。しかし、(1)の文では、方向・場所を表す前置詞句 (PP) の後で、主語と動詞が表面上倒置しているように見える。Rochemont and Culicover (1990) に従い、以下では(1)のような構文を方向・場所倒置構文 (Directional/Locative Inversion)、略して D/L 構文と呼ぶことにする。

- (1) a. Into the room walked John.
- b. Down the stairs fell the baby.
- c. Next to Bill sat my wife.
- d. Near the river stands an oil-factory.
- e. On the table was put a valuable book.

D/L 構文の派生と構造に関して、生成文法の文献においても、Emonds (1976) 以来さまざまな分析が提案されてきている。大部分の分析に従い、方向や場所の PP は移動規則によって文頭へ前置されると仮定すると、PP-V-NP という表層の語順を派生するには、少なくとも次の3通りの方法が考えられる。

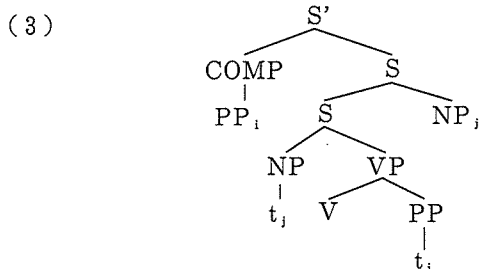
- (2) a.  $PP_i [t_j V t_i] NP_j$
- b.  $PP_i V_j [NP t_j t_i]$
- c.  $[PP_i V NP t_i]$

第一の方法は、主語を動詞の後のある位置へ後置することで V-NP 語順を派生する。第二の方法は、動詞を主語の前のある位置へ繰り上げることで V-NP 語順を派生する。第三の方法は、問題の V-NP 連鎖を基底で直接生成する。本稿では、D/L 構文の統語的事実に基づいてこれら3つの可能な分析を比較、検討し、第三の基底生成分析が最も妥当であると主張する。さらに、基底生成分析を仮定すると、D/L 構文を NP 移動構文の一種と特徴づけできることを示唆する。

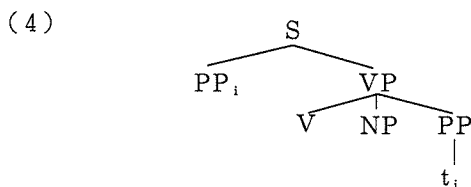
### 2. 主語後置分析と基底生成分析

主語後置分析は、(2a) のように、PP の左方移動と主語 NP の右方移動を適用して PP-V-

NP という表層語順を派生する。移動される PP や NP の着地点に関しては研究者の間で意見が分かっているが<sup>(1)</sup>、ここでは、Safir (1985 : 301) の分析を考察することにする。Safir (1985) は、(3) のように、PP は COMP へ移動し、NP は S へ付加されると分析する。



一方、Coopmans (1989) や Hoekstra and Mulder (1990) などは、動詞後の NP を基底で直接生成することを提案している。本稿では、概略(4)のように、問題の NP を動詞の目的語として生成し、空の主語位置へ PP を移動するという分析を提案する<sup>(2)</sup>。



さて、2つの分析のうちどちらがD/L構文の統語的性質を正しく予測するかを検討しよう。

英語では、(5 a) の *nude*、(5 b) の *raw* のような付帯の状態を表す修飾語句がある。これらの二次述語は、(6) のように VP と共に移動できるので、VP 内 (の末尾) に現れると考えられる。

- (5) a. John entered the room nude.
- b. John ate the meat raw.
- (6) a. They said John would enter the room nude, and [<sub>VP</sub> enter the room nude], John did.
- b. They said John would eat the meat raw, and [<sub>VP</sub> eat the meat raw], John did.

主語後置分析は、文末に付加される NP が二次述語の右に現れると予測する。これに対し、基底生成分析は、(5 a, b) の場合と同様、目的語の NP が二次述語に先行すると予測する。実際には (7 a) が非文法的で、(7 b) が文法的なので、基底生成分析の方が事実と合致していると言える。

- (7) a. Into the room walked John nude.
- b. \*Into the room walked nude John.

第二の議論は様態の副詞との語順に関わるものである。よく知られているように、様態の副詞は比較的自由に VP 内の位置に現れるが、英語では (8 d) のように、動詞とその目的語の間には介在できない。

- (8) a. Paul quietly opened the door.  
 b. Paul opened the door quietly.  
 c. Paul walked quietly into the room.  
 d. \*Paul opened quietly the door.

D/L 構文においても、様態の副詞の生起は比較的自由であるが、動詞とそれに後続する NP の間には生起できない。

- (9) a. On the verandah sat two tourists quietly.  
 b. On the verandah quietly sat two tourists. (Levine 1989 : 1033)  
 (10) a. Down the stairs into the ballroom slowly walked the Queen.  
 b. \*Down the stairs into the ballroom walked slowly the Queen.  
 (Rochemont and Culicover 1990 : 99)

(10)において the Queen が動詞 walk の目的語であると仮定すれば、(10 b) の非文法性は (8 a) と平行的に扱えるが<sup>(3)</sup>、一方、the Queen が文末へ後置されると仮定すると全く説明がつかない。このように、副詞の分布に関する事実もまた、基底生成分析を支持すると思われる。

第三に、水光 (1985) によれば、(11) のように、文中のある要素が右方移動されると、その要素の左に音調上の切れ目 (句切り) がくる。

- (11) a. John explained to his son / the importance of being honest.  
 b. I will send to the New York office / all the instructions my boss gave me. (水光1985 : 83)

主語後置分析を仮定すると、右方移動される NP の左に句切りがくると予想される。ところが、(12 a) に対し、(12 b) のように、動詞とそれに後続する NP の間で句切るの不自然である。

- (12) a. Into the room / walked John.  
 b. ?Into the room walked / John.

Tokizaki (1989) の分析によれば、随意的な句切りは、その文を構成する要素の最も大きな切れ目の位置に最も生じ易い。従って、その位置で句切らずに他の位置に句切りを置くと、不自然になる。

- (13) a. John / loves Mary.  
 b. ?John loves / Mary.

(13) では主語と動詞句の間が構成素の主要な切れ目となるので、その位置に優先的に句切りが置かれる。(13 b) では、動詞とその目的語は最大の切れ目ではないにもかかわらず、その位置のみ句切りが置かれているので不自然になる。(12) の場合、walked John が VP を構成すると仮定すれば、文頭の PP との間が構成素の最大の切れ目となるので、この位置に句切りが優先的に置かれることになる。このようにして、基底生成分析の下では、(12) と (13) に見られる音調上の類似性を自然にとらえることができる。

基底生成分析を支持するもう一つの証拠は、否定の作用域に関する事実である。

- (14) a. \*Any of the men didn't walk into the room.  
 b. The men didn't walk into any of the room.  
 (15) a. \*Into any of the rooms didn't walk the men.  
 b. Into the room didn't walk any of the men. (Culicover 1981 : 19)

今、否定辞 not の作用域は、それが c-統御 (c-command) し、かつそれに後続する節点からなる領域であると仮定し、さらに、存在の any は否定の作用域内になければならないと仮定しよう。(17 a, b) の対立は、主語位置の要素は否定の作用域内にはないが、動詞句内の要素は作用域に含まれることを示している。(15 a) の any は not に先行するため、その作用域内にはない。一方、(15 b) の文法性は、先行条件が満たされているので、not が any を c-統御するかどうかで決まる。もし動詞後の NP が主語位置から後置され S に付加されているとすれば、not は any を c-統御しない。従って、(15 b) は非文法的であると予測されるが、これは事実と反する。一方、動詞後の NP が目的語として生成され、その位置から移動していないとすれば、not は any を c-統御するので、(15 b) の文法性が正しく予測される<sup>(4)</sup>。

この節では、D/L 構文の動詞後の NP が二次述語に先行すること、動詞と NP は態様の副詞の介在を許さず動詞と隣接すること、音調の切れ目が動詞の左には生じうるが右には生じないこと、および動詞後の NP が否定の作用域内にあることを観察した。これらの事実は主語後置分析からは予想されないが、基底生成分析を仮定すれば正しく予測できる。従って、後者の分析の方が経験的に妥当であると言える。

### 3. 動詞繰り上げ分析とその問題点

Emonds (1976), 田頭 (1985), Rochemont and Culicover (1990) などは、主語を移動するのではなく、むしろ動詞を主語の左に移動する分析を提案している。この節では、動詞繰り上げ分析の概要を述べ、その妥当性について検討する。3.1節では、この分析にもいくつかの問題点があることを指摘し、3.2節では、基底生成分析との比較を通して、後者の分析を支持すると思われる事実を提示する。

#### 3.1. 動詞繰り上げ分析

Emonds (1976) の分析によると、ある特定の要素が COMP へ代入移動されると、倒置語順を生み出すルート変形が適用される。例えば、(16 a, b) のように、主節主語以外の要素が WH 移動あるいは否定構成素前置移動によって COMP へ移動されると、その移動が引き金となって、主

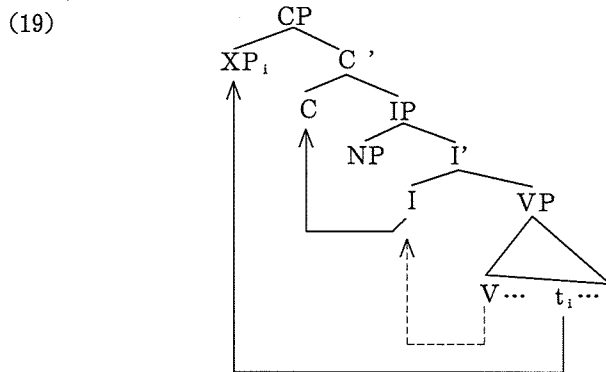
節主語と助動詞の倒置 (Subject-Auxiliary Inversion) が義務的に起こる。これと同様に、(16 c) では方向語句の COMP への前置移動が、主語と単純形動詞の倒置 (Subject Simple Verb Inversion) を引き起こす。ここでは、後者の倒置規則は、(16 c) に示されているように、動詞をもとの位置から主語の左へ移動する規則であると考えられる。そうすると、Emonds (1976) の分析は動詞繰り上げ分析の一種と見なすことができる。

- (16) a. [<sub>S</sub>[Which book]<sub>i</sub> [<sub>S</sub> can<sub>j</sub> John t<sub>j</sub> read t<sub>j</sub> read t<sub>i</sub>]]?  
 b. [<sub>S</sub>[With no job]<sub>i</sub> [<sub>S</sub> can<sub>j</sub> John t<sub>j</sub> be happy t<sub>i</sub>]]  
 c. [<sub>S</sub>[Into the room]<sub>i</sub> [<sub>S</sub> walked<sub>j</sub> John t<sub>j</sub> t<sub>i</sub>]]

上の派生には、COMP への移動が引き金となって、時制を担う要素が S の先頭へ移動するという平行性がある。と同時に、(16 a, b) では助動詞、(16 c) では動詞が主語の左に移動するという違いがある。これらの点を明らかにするために、Chomsky(1986) に従い、非語彙範疇も X 理論の型式 (17) に従うと仮定しよう。この仮定の下では、(16) の派生は (18) のように表される。

- (17) a.  $XP \rightarrow XP^* X'$   
 b.  $X' \rightarrow X XP^*$   
 (18) a. [<sub>CP</sub> Which book<sub>i</sub> [<sub>C'</sub> can<sub>j</sub> [<sub>IP</sub> John [<sub>I'</sub> t<sub>j</sub>[read t<sub>i</sub>]]]]]  
 b. [<sub>CP</sub> With no job<sub>i</sub> [<sub>C'</sub> can<sub>j</sub> [<sub>IP</sub> John [[<sub>I'</sub> be happy t<sub>i</sub>]]]]]  
 c. [<sub>CP</sub> Into the room<sub>i</sub> [<sub>C'</sub> walked<sub>j</sub> [<sub>IP</sub> John [<sub>I'</sub> t<sub>j</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub>]]]]]

(18) の派生に共通して関わっている移動は、CP 指定部への XP の移動と CP 主要部 C への時制要素の移動である。(これらの移動は、下の (19) において実線で示されている。) 第一の移動がなぜ第二の移動を引き起こすのだろうか。ここでは暫定的に、主節の CP 指定部に移動した Wh 句、否定語句は、CP の主要部 C によって局所的に認可されねばならず、しかも C が時制 (および一致要素) を含む場合に認可が適切に行われると仮定しよう<sup>(5)</sup>。方向語句も同様の性質を持つと仮定すれば、(18 c) においても、前置された方向語句を局所的に認可するために I-to-C 移動が起こると考えられる<sup>(6)</sup>。



ただし、(18) では C へ移動する要素のもとの位置が異なっている。(18 a, b) では INFL の位

置に語彙挿入された助動詞の *can* が C へ移動するが、移動先の C の位置はもとの位置 I を統率するので、主要部移動として適格である。これに対し、(18c) のように動詞 *walk* が C へ移動する場合、主要部移動の制約により、VP 主要部の位置から直接 C へ移動することはできない<sup>(7)</sup>。(20)の破線が示すように、動詞は一度 I へ移動し、その位置からさらに C へ移動しなければならない。このように、D/L 構文の派生には、V-to-I 移動と I-to-C 移動という 2 つの主要部移動が関わっている。注意すべきことは、I-to-C 移動の適用が動詞の INFL への移動を前提とすることである。この意味で動詞の INFL への繰り上げ移動は、動詞繰り上げ分析の根幹をなす部分であるが、この仮定には次のような問題がある。

英語では、V-to-I 移動は語彙的に制限されており、相動詞としての用法を持つ *have*, *be* だけが、助動詞と同じ INFL の位置へ繰り上げられる。その結果として、疑問文や否定文において *have*, *be* は助動詞的な性質を示す。これに対し、語彙的な動詞は INFL へ移動しないので、孤立した時制要素を語彙的に支えるために *do* 挿入が必要になると考えられている。この他にも、INFL への繰り上げは *have*, *be* に限られ、それ以外の動詞は V-to-I 移動を受けないことを示す事実がある<sup>(8)</sup>。

- (20) a. \*John completely will lose his mind.  
 b. \*John completely has lost his mind.  
 c. \*John completely is losing his mind.  
 (21) a. John will completely lose his mind.  
 b. John has completely lost his mind.  
 c. John is completely losing his mind.  
 (22) a. John completely lost his mind.  
 b. \*John lost completely his mind.

動詞句を修飾する *completely* などの副詞は、VP の左に付加され、それ自体は移動しないと仮定すると、この種の副詞の生起分布は、INFL への繰り上げを *have*, *be* に限定することで説明できる。しかし、INFL への繰り上げ移動を語彙的な動詞にも拡張すると、(22b) の非文法性の説明が難しくなる。このような操作は、D/L 構文を派生するためにだけ必要となるのであって、経験的な動機付けがあるとは言えない。さらに、(23b) では (23a) と同様に、副詞が動詞の前に現れる。この事実は、D/L 構文においても、語彙的な動詞の繰り上げが起こらないことを示している。

- (23) a. A picture of Chiyonofuji still hangs on that wall.  
 b. On that wall still hangs a picture of Chiyonofuji.  
 c. \*On that wall hangs still a picture of Chiyonofuji.

第二の問題点は、語彙的な動詞の INFL への繰り上げ移動を可能にするためには、アドホックな装置を文法にを導入しなければならず、その結果動詞の統語論を著しく複雑化させることである。

例えば、Rochemont and Culicover (1990) では、相動詞との再構造化が提案されている<sup>(9)</sup>。かれらの主張によれば、*walk*, *stand* など、方向や場所の PP をとる動詞は、その語彙特性として相動詞を統率の下で再構造化し、その結果できる複合動詞が相動詞の性質を受け継ぐ。例えば、

(24) は, [ ] 内の要素が再構造化された後, INFL へ繰り上がり, さらに主語の左へ移動して派生されることになる.

- (24) a. In front of Mary [was sitting] her mother.  
 b. In each hallway [has long stood] a large poster of Lincon.

しかし, かりに再構造化を認めるとしても, この方法は新たな問題を次々に引き起こす.

- (25) a. Into the room [ $\phi$  walked] John.  
 b. Across from him [should [ $\phi$  sit]] Mary.

(24) と違い, (25 a) では相動詞が現れていない. そこで, Rochemont and Culicover は空の相動詞  $\phi$  を想定し, (25 a) の動詞 walk は  $\phi$  を再構造化して INFL へ繰り上がると考える. しかし, かれら自身も認めているように, 空の相動詞はこの場合以外には全く存在理由のない装置である. また, (25 b) では INFL の位置が助動詞によって語彙的に埋められているにもかかわらず, 相動詞化した [ $\phi$  sit] の INFL への繰り上げが行われる. これは再構造化によって生じた相動詞にしか見られない性質である. というのは, (26) が示すように, have, be のような確立した相動詞は, 助動詞があるときには INFL へ移動しないからである.

- (26) a. \*?George will completely be finishing his carrots by now.  
 b. \*?George will completely have read the book. (Jackendoff 1972 : 75)

下の (27) のような D/L 構文は, 再構造化を仮定する動詞繰り上げ分析にとってもうひとつの問題を提起する.

- (27) a. Into this house appears to have walked an alcoholic.  
 b. Near the river is likely to be lying an old man. (Stowell 1981 : 274)

例えば (27 a) を派生するためには, (28) において埋め込み節の動詞が主節の相動詞  $\phi$  を再構造化しなければならないが, 再構造化のために必要な統率条件が満たされていない. また, 再構造化の結果生じる相動詞が, 語彙範疇  $X^0$  であるにもかかわらず, 主語 NP の痕跡を含むことになる.

- (28) [<sub>IP</sub>[<sub>NP</sub> an alcoholic]<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> I [<sub>VP</sub>  $\phi$  [<sub>VP</sub> appear [<sub>IP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> to [ have [<sub>VP</sub> walked into this house]]]]]]]]]]]

これまで見てきたように, 語彙的な動詞を INFL へ繰り上げることは経験的に動機づけられていないばかりでなく, この移動を可能にするための装置も理論上さまざまな問題を引き起こす. 一方, D/L 構文の V - NP 語順が基底で直接生成されるとすれば, このような問題は生じない. この点で, 基底生成分析の方が望ましいと言える.



### 3.2. 基底生成分析との比較

D/L構文の動詞後のNPは、動詞繰り上げ分析では主語位置を占めるのに対して、基底生成分析では目的語位置を占める。この節では、後者の分析を支持すると思われる事実があることを主張する。

次の(29)が示すように、walk, runなどの運動動詞は方向を表すPPを伴うときにのみD/L構文に現れうるという制限がある。

- (29) a. Into the room walked my friend John.  
 b. \*In the room walked my friend John.

動詞繰り上げ分析の下で上の事実をとらえるためには、運動動詞の語彙記載の中に、方向のPPを伴うときにのみ相動詞を再構造化するという情報を書き加える必要がある。しかし、このような制限の付加は孤立した事実の記述にすぎず、なぜこのような事実があるのかを説明していない。これに対し、基底生成分析では他の言語において観察される事実と関連させて上の事実を説明する可能性がある。

運動動詞は通常外項(external argument)をとる自動詞に分類される。しかし、方向の語句が存在すると、運動の主体者が同時に場所の移動を経験するものと解釈される。このような項にはTheme  $\theta$ 役割が与えられ、動詞の内項として投射されると考えられる。実際、方向語句を伴うという条件の下で、運動動詞が内項(internal argument)をとる非対格動詞化することを示す言語がある。

例えば、Coopmans (1989)の観察によると、オランダ語では完了の助動詞として非能格動詞はhebben ('have')を、非対格動詞はzijn ('be')をそれぞれ選択するが、(30)のように、方向語句を伴う運動動詞はzijnを選択しうる。また、過去分詞は名詞前の位置ではもとの動詞の内項を修飾するが、運動動詞の場合(31)のように、方向語句をとるときにのみこれが可能となる。

- (30) a. Jan heeft/\*is gewandeld/gelopen.  
           'John has walked'  
 b. Jan heeft/is naar Engeland gewandeld/gelopen.  
           'John has walked to England'
- (31) a. \*de gewandeld/gerende/gevlogen jongen  
           'the walked/run/flown boy'  
 b. de naar Engeland gewandeld/gerende/gevlogen jongen  
           'the to England walked/run/flown boy' (Coopmans 1979 : 741-742)

運動動詞が方向語句を伴うときに非対格動詞のようにふるまうことは、イタリア語のne接辞化(ne-cliticization)に関しても観察される。

- (32) a. \*Ne<sub>i</sub> hanno corso [<sub>NP</sub> due t<sub>i</sub>].  
           'of them have run two'  
 b. Ne<sub>i</sub> sono corsi [<sub>NP</sub> due t<sub>i</sub>] a casa.  
           'of them have run to home' (Levin and Rappaport 1989 : 325)

Belletti and Rizzi (1981) などの研究により、ne の移動は、主語や付加語の NP からは起こらないが目的語の NP からは可能であることが知られている。運動動詞では、(32) が示すように、方向語句を伴うときにのみ、ne の移動が可能になる。このことから、(32 b) の NP は目的語であると考えられる。

(29) が示すように、D/L 構文に現れる運動動詞は必ず方向語句を伴う。この事実から、オランダ語やイタリア語と同様の条件の下で、英語の運動動詞も非対格動詞への交替を示すと考えられる。これが正しいとすれば、(29 a) の動詞後の NP は内項として目的語位置に生成され、一方、(29 b, c) では NP は外項として主語位置に生成される。基底生成分析では動詞繰り上げを仮定しないので、これらの文は派生されず、正しく排除される。

基底生成分析に対するもうひとつの支持は、付加語節内の PRO のコントロールに関する事実から得られる。(36 a) が示すように、付加語節の主語の PRO は arb 解釈ができないので、コントローラーを義務的に必要とし、それに c-統御されねばならない。一方、副詞的付加語節は VP に付加されているか、IP に支配されていると考えられる。いずれの場合にも、主節主語は PRO を c-統御するが、主節目的語はそれを c-統御しない。従って、(33 b) が示すように、付加語節中の PRO は常に主語がコントローラーとなる。

- (33) a. John entered the room [without PRO introducing himself/\*oneself].  
 b. John amused Mary [without PRO exerting himself/\*herself].

Postal (1977) によれば、D/L 構文の動詞後の NP は PRO をコントロールできない。

- (34) a. Near the waterhole a rhinoceros<sub>i</sub> lay [without PRO<sub>i</sub> moving].  
 b. \*Near the waterhole lay a rhinoceros<sub>i</sub> [without PRO<sub>i</sub> moving].

この事実は、動詞後の NP を主語であるとする動詞繰り上げ分析では説明できないが、それを動詞の目的語として生成する分析では予想されることである。

この節では、方向語句を伴う運動動詞の非対格動詞的性質とコントロールに関する事実によって、動詞後の NP を主語ではなく目的語として生成する分析が支持されることを見た。

#### 4. 基底生成分析の帰結と課題

これまでの議論から、D/L 構文の V - NP 語順は、主語後置あるいは動詞繰り上げによって派生されるのではなく、動詞およびその目的語として直接基底で生成されると考えられる。この節では基底生成分析を仮定して、文頭の PP の構造上の位置と D/L 構文に現れる動詞類の制限を考察し、最後にこの分析が解決すべき課題について簡単にふれる。

##### 4.1. 主語位置への PP 移動

方向・場所の PP の移動先をめぐるこれまで多くの提案がなされてきた。基底生成分析を仮定すれば、PP は空の主語の位置へ移動すると考えるのが自然である。以下では、主語に特徴的な性質を 4 つ挙げ、これらの性質を問題の PP が共有することを示す。

まず第一に、(35) のように、seem など少数の述語は、補文の主語から主節主語位置への繰り上げ (subject-to-subject raising) を許す。D/L 構文が繰り上げ述語の不定詞補部に埋め込まれるときには、(36) (= (27)) のように、PP が繰り上げ移動を受ける。このことは、PP が補文の主語の位置を占めることを示している。

- (35) a. [John]<sub>i</sub> seems [t<sub>i</sub> to be rich].  
 b. [John]<sub>i</sub> is likely [t<sub>i</sub> to win].  
 (36) a. [Into this house]<sub>i</sub> appears [t<sub>i</sub> to have walked an alcoholic t<sub>i</sub>].  
 b. [Near the river]<sub>i</sub> is likely [t<sub>i</sub> to be lying an old man t<sub>i</sub>].

次に、コンマポーズによって主節主語が後続要素から切り離されると非文になるが、PP もまたいわゆる「短距離」話題化を許さない。

- (37) a. \*Mary, walked into the room.  
 b. \*Into the room, walked Mary.

一方、埋め込み節の主語を話題化することは可能であるが、そのときには補文標識の that が現れてはならない。埋め込まれた D/L 構文から PP を話題化する場合にも同様に that-trace 効果が観察される。

- (38) a. [John]<sub>i</sub> I think [( \*that) t<sub>i</sub> won the race] (Lasnik and Saito 1992 : 76)  
 b. [In this garden]<sub>i</sub> everyone believes [( \*that) t<sub>i</sub> stands an elegant fountain] (Langendoen 1979 : 434)

最後に、主節主語の WH 移動は、主語助動詞倒置を引き起こさない。同様のことが、D/L 構文の PP の WH 移動に関しても観察される。

- (39) a. [What]<sub>i</sub> [t<sub>i</sub> stands in the garden] ?  
 b. [In which garden]<sub>i</sub> [t<sub>i</sub> stands a fountain] ? (Bowers 1976 : 237)

このように、D/L 構文の文頭の PP は、少なくともそれ自身の移動に関して、通常の主語と顕著な平行性を示す。主語の抜き出しに関わる統語現象は活発に議論されているが、現在のところまだ決定的な理論は出ていないように思われる。これらの現象が最終的にどのように説明されるにしても、上で観察した平行性をとらえるには、D/L 構文の PP が主語位置を占めると仮定するのが最も自然であると思われる。

#### 4.2. 動詞の類

D/L 構文の動詞の類には一定の制限があり、(40) のように他動詞や、(41) のようにある種の自動詞は D/L 構文には現れない。

- (40) a. \*Into the room pushed John his sister.  
 b. \*Into the room pushed his sister John.



### 4.3. 課題

本稿で提案した分析にとって問題となるのは、動詞後の NP が2つの点で主語的な性質を示すことである。(47) が示すように、英語の時制節では、動詞の形は主語の人称、数と通常一致する。D/L 構文においては、動詞の定形は主語位置の PP ではなくて、目的語位置の NP と一致する。

- (47) a. A bronze statue stands / \*stand at the top of the hill.  
 b. Two bronze statues stand / \*stands at the top of the hill.  
 (48) a. At the top of the hill stands / \*stand a bronze statue.  
 b. At the top of the hill stand / \*stands two bronze statues.

もうひとつの主語的な性質は、(49) のように、主格の代名詞が目的語位置に現れることである。

- (49) a. Under the tree stood he and his wife.  
 b. On the bench sat she and your son. (Iwakura 1978 : 329)

これらの一致と格に関する事実は基底生成分析が解決すべき問題である。4.2節で述べたように、D/L 構文では表面的に PP が移動しているにすぎず、基本的には NP 移動構文と見なすことができる。この方向をもう一步押し進めると、D/L 構文は NP in situ 構文であると考えられる。つまり、基底で目的語として生成される NP は表面的には移動しないが、PP が移動した位置へ LF の段階で移動すると仮定すると、一致と格に関する事実を説明できるかもしれない。LF での NP 移動という考えは、新しい視点から D/L 構文の特徴をとらえる可能性があると思われるが、その場合、表面的な PP 移動がなぜ LF での NP 移動を可能にするのか、という疑問が依然として残る。これらの移動の必然的な関連を明らかにすることは今後の課題である。

## 5. ま と め

本稿では、D/L 構文の動詞後の NP は目的語位置に生成され、方向・場所の PP は主語位置へ移動されるという分析を提案し、この分析が他の競合する分析よりも経験的に妥当であるばかりでなく、NP 移動という新しい観点から D/L 構文の特徴をとらえる可能性を提供することを示した。

## 註

- (1) Stowell (1981) の分析では、主語が VP へ付加された後、PP が空になった主語位置へ移動し、さらに COMP へ話題化される。Bowers (1976) は、主語を空の目的語位置へ後置する。これらの分析では、主語後置が下降 (lowering) 移動であり、主語の痕跡が適正に束縛されないという問題がある。  
 (2) Coopmans (1989) は、主語位置は空ではなく、pro が生成され、COMP へ移動した PP によって認可されると主張する。Hoekstra and Mulder (1990) は、(4) の NP と PP は小節 (small clause) を構成し、PP が空の主語位置へ移動すると主張する。  
 (3) Stowell (1981) などでは、格付与に隣接条件が課せられており、このため格を付与する動詞と付与される NP

は隣接しなければならない。しかし、D/L構文の動詞後のNPは主格であり、動詞は格付与子として働かない(4.3節参照)。従って、格付与以外の観点から隣接性を導く必要がある。

- (4) (15b)の文法性は Culicover(1981)の判断による。Rochemont and Culicover (1990:105)は、否定のD/L構文を非文法的と判断している。
- (i) \*Into the room didn' walk John.
- (5) コンマポーズを伴う否定語句は、CPの外にあると考えられる。このときには主語助動詞倒置は不必要である。方向語句の場合も同様である。
- (i) \*With no job, can John be happy.  
(ii) \*Into the room, walked Mary.
- (6) (i)はI-to-C移動が適用しているにもかかわらず非文法的である。D/L構文の場合に限り、Cへ移動した時制(および一致)要素だけではCP指定部の語句を認可できず、動詞を必要とするのはなぜかという疑問が残る。
- (i) \*Into the room will John walk.
- (7) 主要部移動の制約に関しては Chomsky (1986:68-73) および Baker (1986:52-62)を参照。
- (8) Pollock (1989)によれば、フランス語では語彙的な動詞もINFLへ移動する。彼はこの違いを、フランス語と英語の一致要素の強さの違いに関連させている。
- (9) Rochemont and Culicover (1990)の分析では、D/L構文は次のように派生される。
- (i)a. John [<sub>IP</sub> I [<sub>VP</sub> walk into the room nude]]  
b. John [<sub>IP</sub> walked [<sub>VP</sub> tv into the room nude]]  
c. [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> tv into the room nude]<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> John [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> till]]]]  
d. [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> tv into the room nude]<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> [<sub>i</sub> walked]<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> John [<sub>IP</sub> [<sub>i</sub> t<sub>i</sub>] [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub>]]]]]]
- まず動詞がINFLへ繰り上がり、次にVPが話題化によってIPへ付加される。最後に、[<sub>i</sub> V<sub>i</sub>]が下のIPへ付加される。

## 引用文献

- Baker, M. (1988) *Incorporation: Theory of Grammatical Function Changing*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Belletti, A. and L. Rizzi (1981) "The syntax of "ne": Some theoretical implications," *The Linguistic Review* 1, 117-154.
- Bawers, J. S. (1976) "On the grammatical relations and the structure-preserving hypothesis," *Linguistic Analysis* 2, 225-242.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Coopmans, P. (1989) "Where stylistic and syntactic processes meet: Locative inversion in English," *Language* 65, 728-751.
- Culicover, P. (1981) *Negative Curiosities*. Indiana University Linguistic Club.
- Emonds, J. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*. Academic Press, New York.
- Hoekstra, T. and R. Mulder (1990) "Unergatives as copular verbs," *The Linguistic Review* 7, 1-79.
- Iwakura, K. (1978) "On root transformations and the structure preserving hypothesis," *Linguistic Analysis* 4, 321-364.
- Jackendoff, R. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Langendoen, D. T. (1979) "More on locative inversion sentences," *Linguistic Analysis* 5, 421-437.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move- $\alpha$ : Conditions on Its Application and Output*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Levin, B. and M. Rappaport (1989) "An approach to unaccusative mismatches," *Proceedings of NELS* 19, 314-329.
- Levine, R. (1989) "On focus inversion: Syntactic valence and the role of a SUBCAT list," *Linguistics* 27, 1013-1055.
- Pollock, J.-Y. (1989) "Verb movement, Universal Grammar, and the structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Postal, P. M. (1977) "About" nonargument "for raising," *Linguistic Inquiry* 8, 141-154.

- Rochemont, M. and P. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge University Press.
- Safir, K. (1985) *Syntactic Chains*. Cambridge University Press.
- Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*. Doctoral dissertation, MIT.
- 水光 雅則 (1985) 『発音と文法』. 大修館書店, 東京.
- 田頭 敏彦 (1985) 「英語の Locative Inversion Construction について」, *Linguistic Research* 4, 18-32. 京都大学言語学研究会.
- Tokizaki, H. (1989) "Variable Intonation Phrasing in English," *Proceedings of the Tokyo Linguistics Forum* 1, 140-162.

(本学講師, 函館校)